Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-12-25

文化サークル「常民学舎」と歴史民俗誌『Sala』の歩みとこれからの活動

吉田，ふみゑ

(Citation)
歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集,11:25-34

(Issue Date)
2013-02-02

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004429

文化サークル「常民学舎」と歴史民俗誌『Ｓａ̄ｌａ』の歩みとこれからの活動

歴史民俗誌『Ｓａ̄ｌａ』編集長　吉田ふみゑ

歴史民俗誌『Ｓａ̄ｌａ』（以下サーラ）は、1987 年 1 月 11 日、香寺民俗資料館（姫路市香寺町）に集う有志たちで立ち上げた文化サークル「常民学舎」の機関誌です。同年 4 月 1 日に第 1 号を発行しました。資料館の周辺には、日本玩具博物館・柳田國男（福崎町）、和辻哲郎（仁豊野）の生家などがあることから、歴史・民俗に関心を持った会員が播磨一円から集まりました。

誌名には深い意味はなく、資料館の中庭に咲く沙羅の花（ナツツバキ）から付けられましたが、サラでなくサーラと読ませたいというこだわりがあったようで、1 号から 19 号まで「娑羅（Ｓａ̄ｌａ）」でしたが、30 号記念号から漢字を消して、現在の「Ｓａ̄ｌａ」にリニューアルしました。

発会以来、会長は難波正司（58 歳）で、「生命」「生活」「人生」「学び舎」「交流」「伝承」を謳い、年会費 3000 円、会主催の講座に参加でき、年 2 回発行の「サーラ」を無料配布、会員同士の交流を図る、は変わっていません。寄稿料は、会費で支えられていますので、これまでもこれからも頂きません。

設立時、200 人集まっていた会員は、1 年後は 100 人に減少しましたが、その後は普通会員は常時 120 名を維持しています。定期読者約 50 名、広告代、名刺代を加えての収入で、500 部発行を年 2 回の印刷代と送料・事務費を賄っています。

会員の交流は、植物の観察会とサーラで掲載した論文の現地を訪ねる 1 日バス旅行を春秋で 4 回開いています。講師は自然保護観察委員の藤原正人先生、庭園研究家の西桂先生、石造美術研究の三浦孝一先生が受けて下さっています。

こういった行事に参加しない会費だけの会員も多く、その方々に還元でき、繋がるのは機関誌の『サーラ』だと思い、魅力ある会誌作りを心掛けてきました。

サーラの 3 号までは、いかにも歴史民俗誌といった装丁の冊子でしたが、4 号から小動植物の撮影を得意とする木村修二さんの写真で表紙を飾り、文字をぎりぎりまで大きくし、写真・図版を多く入れてレイアウトしています。また、「編集部便り」は本文に興味を向けてもらえるように著者のエピソードや、関連性のあることを紹介するように努めています。読むことより、まず親しんでもらえることが第一で、それが会員、読者の裾野を広げ、継続に繋がると考えます。編集者としては、知りたい、学びたい、という読み手が増えること、読んでもらいたい、知ってもらいたい、という書き手の想いがかなうことで相互援助を成立させたいと願っています。

会発足から 26 年になると、確かに高齢化が顕著になってきましたが、サーラを通しての会員たちの縦横無尽の繋がりは大きな広がりをみせています。その中で、若い世代に繋がったのが綿の歴史学習です。

24 年前の春、今は故人となられた会員さんから綿の種を頂いたのが契機でした。私の夫は、昭和 30 年頃まで祖母が畑で綿を栽培していた折に、綿を摘んだ思い出があり、頂いた種を早速に播きました。夏に白い花が咲き、実がつき、秋には実がはじけ、中から白い綿が顔を覗かせました。

毎年綿を栽培するようになると、綿繰りという種を取る古い道具を届けてくださる会員さんが現われました。別の会員さんが糸車を作ってくださいましたので、糸紡ぎのできる会員さんが、糸紡ぎを教えてくれました。それで４年前から、子供たちに綿のことを知ってもらいたいと加古川町粟津の休耕田で 260 本の綿を作り、11 月 3 日に「綿まつり」を開くようになりました。綿畑の中にテントを張り、たくさんの方々に摘んで頂いた綿の種取り、糸紡ぎを体験してもらっています。

播磨は温暖で古くから綿が盛んに栽培されていた土地で、姫路藩はそれに目をつけ、木綿という商品を作りだし、藩の財政をたて直しました。その名残りが、加古川市西神吉町・志方町のタオル・靴下産業です。年々立派に収穫できる綿を見てこの土地がいかに綿作りに適しているかを実感します。

会員には、越知谷小学校に招かれて、地域に伝わる民話を児童に語って聞かせておられる足立誠太郎さん（87 歳・神河町作畑）がおられます。その活動の様子をサーラで紹介しておりましたので、綿作りにもそんな機会があれば、と願っていましたら、加古川市立西神吉小学校（水野修校長）の地域探検クラブ（４・５・６年生９名）担当の原陽一郎教諭がサーラを読まれて、児童たちが楽しめる地域学習を、と依頼して下さいました。江戸時代に全国屈指の綿花の産地だったという郷土の歴史学習を月 1 回を 6 回開く機会に恵まれました。

綿作りの産地であったという歴史学習だけでなく、紡錘車や糸車で紡ぎ出した糸を、手織りして布を作り出す行程を体験することで、すべて手仕事から工業が始ったということも伝えています。

これからも媒体としてのサーラで、こうした地域や、若い世代への活動が盛んになるよう、呼びかけ、また情報を得たいと考えます。

資料１　既刊「サーラ」の表紙　データー

資料２　神戸新聞記事　2011 年 11 月 16 日
「サーラ」創刊 50 号

資料３　神戸新聞記事　2011 年８月４日
播州の綿作り支えた技

資料４　神戸新聞記事　2011 年 11 月２日
江戸期は綿の産地・加古川の歴史伝える「綿まつり」
データー

資料５　神戸新聞記事　2012 年９月 19 日
綿花生産の歴史学ぶ　加古川市立西神吉小学校
地域探検クラブ　データー

資料６　神戸新聞記事　2012 年 11 月６日
地域探検クラブの児童が綿くり体験　データー

資料７　ＣＤ　**播磨の綿まつり　第３回（2011・11・3）第４回（2011・11・3）**
場所・加古川市加古川町粟津（休耕田）

資料８　ＣＤ　**加古川市立西神吉小学校　地域探検クラブ**
○2012 年 10 月 22 日　綿摘みと綿の種とり体験
場所・加古川市西神吉町大国
○2012 年 11 月 19 日と 11 月 26 日　紡錘車と糸車で糸紡ぎ体験
場所・加古川市立西神吉小学校多目的教室
講師、吉田義弘・吉田ふみゑ・溝口操

資料９　神戸新聞記事　2012 年９月 19 日
柳田國男ともに・１話

資料10　　加古川市立西神吉小学校　地域探検クラブの学習プログラム

4・5・6年生9人　　担当・原　陽一郎教諭　　水野　修　校長

1回　9月18日（火）14時45分から15時30分　場所・加古川市西神吉町大国
綿畑の見学　山本徹也先生のお話（郷土史研究）　終了

2回　10月22日（月）14時45分から15時30分　場所・加古川市西神吉町大国
綿摘みと綿の種とり体験　　終了

3回　11月19日（月）14時45分から15時30分
場所・加古川市立西神吉小学校多目的教室
綿繰り・紡錘車・糸車を使って糸紡ぎ体験　　終了

4回　11月26日（月）14時45分から15時30分
場所・加古川市立西神吉小学校多目的教室
綿繰り・紡錘車・糸車を使って糸紡ぎ体験　　終了

5回　2013年
1月28日（月）14時45分から15時30分
場所・加古川市立西神吉小学校多目的教室
紡いだ糸を緯に使って機を織る体験

6回　2月25日（月）14時45分から15時30分
場所・加古川市立西神吉小学校多目的教室
紡いだ糸を緯に使って機を織る体験

資料１

【歴史民俗誌『Ｓａ１ａ』表紙】

【播磨の綿まつり】

資料７

【加古川市立神吉小学校地域探検クラブ】

資料８

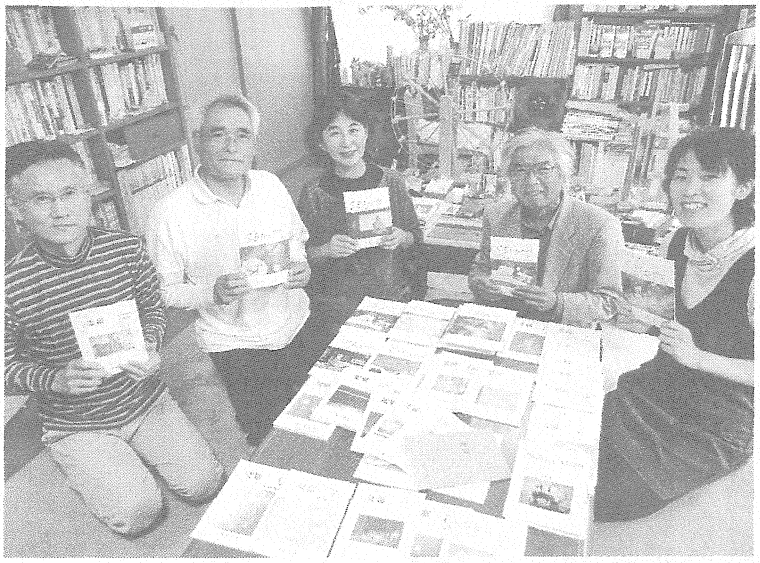
2011.11.16(木) 神戸新聞

（第3種郵便物認可）

市井に息づく伝承、慣習に光

「サーラ」創刊50号

常民学舎 結成25年 多彩リポート



「サーラ」のお気に入りのバックナンバーを手にする常民学舎の難波正司代表（右から2人目）と会員ら＝加古川市西神吉町大国

播磨を拠点に、市井の人に受け継がれる伝承や慣習に光を当ててきた文化団体「常民学舎」が結成25年となり、年2回発行の機関紙「Sāla（サーラ）」も創刊50号を迎えた。郷土史や民俗学の多彩なリポートを掲載しており、難波正司代表(57)＝姫路市香寺町相坂＝は「播磨の民俗学を調べるのに役立つ事典の役割を果たしていきたい」と話している。（宮沢之祐）

播磨の「事典的役割」目指す

常民学舎は1987年1月に播磨地域の歴史愛好家らが結成。福崎町出身の「日本民俗学の父」柳田国男に倣い、暮らしに根ざす文化の記録に取り組み、野外講座も開いている。会員は約200人で、発足当初より50人増えた。

サーラはA5判で、通常は約70ページ。誌名は、結成時に勉強会の場だったという作品が表紙を飾る。

毎回、個性的なテーマの研究報告を会員らが執筆。高句麗から播磨に来た僧、恵便の足跡や、岩に丸いくぼみが付けられた盃状穴の分析、夏目漱石と兵庫とのかかわりなどを紹介してきた。若い世代も参加し、神河町在住の井上知美さん(26)が地元の正月や盆の風習について連載している。

10月に出た50号は108ページあり、昭和30年代の播磨の思い出をテーマにした会員らの座談会を特集した。「定期発行を続けたことで市民権を得られた」と難波代表。編集に当たる吉田ふみるさん(60)＝加古川市西神吉町大国＝は「発行を通して人との出会いがあり、支えられてきた」と感謝する。

50号は千円。11号以降のバックナンバーはほぼそろっており、1冊800円。常民学舎会員（年会費3千円）には無料配布される。吉田さん☎079・432・0956

香寺民俗資料館にある沙羅の木にちなむ。アマ写真家木村修二さん(62)＝加古川市西神吉町大国＝の郷愁漂

たり、子どもが元気に遊

雰囲気が漂う。園児らは

ている。

資料2

戸　新　聞　2011年（H23）8月4日（第3種郵便物認可）　神戸新聞

播州の綿作り支えた技

県立歴史博物館　一式そろい「貴重」

江戸時代に全国屈指の綿の産地だった加古川河口域の歴史を伝える貴重な史料が、県立歴史博物館（姫路市）にこのほど寄贈された。綿花から種を取り除く綿繰機の製作道具一式や、「綿操取締」の焼き印がある江戸末期の鑑札で、加古川市内の民家の納屋に残されていた。（宮沢之祐）

加古川の岡田さん　綿繰機の製作道具を寄贈

父の代まで綿繰機を製作してきた同市加古川町木村の岡田進さん(77)が寄贈した。道具は亡父の文治さんの愛用品で、1951（昭和26）年ごろまで使っていたという。

綿繰機は一対のローラーの間に綿花を通し、種を分離させて繊維だけを押し出す。岡田さん宅には、凹凸があるローラーを作るための竹製の型枠や、削るための台、三木産の特製ののこぎりなどがそろっていた。作りかけのローラーもあり、製作工程をうかがわせる。

また鑑札は、幕末の1863（文久3）年に岡田さんの曾祖父に発行されたもので、姫路藩が綿繰機の製作を認めたとみられる。

江戸時代の鑑札も

歴史民俗誌の編集者吉田ふみあきさん(59)＝同市西神吉町大国＝によると、姫路藩は当時、財政再建のため木綿専売制を実施し、播州の綿作はいっそう盛んになった。

岡田さんは昨年11月、加古川市内の綿畑で吉田さんらが開いた「綿まつり」を訪ねた。それを機に、同博物館の小栗栖健治館長補佐を紹介され、道具一式と鑑札を寄贈する話がまとまった。

同博物館の香川雅信学芸員は「綿繰機を作るための道具は初めて見た。まとまって残っており貴重」と評価。「こうした技術が、姫路藩の重要産業だった木綿生産の一翼を担った」と指摘する。

岡田さんは、カシの木片を削り、ローラーを作る父の姿を覚えている。「大切にしていた道具が日の目を見て、父も喜ぶと思う」と語った。

▲綿繰機のローラーを手に、寄贈する道具の説明をする岡田進さん（右）＝いずれも加古川市加古川町木村

「綿操取締」の焼き印がある鑑札

せ

）生徒ら

合同演奏会に臨み、美しいハーモニーを響かせた。

こうヨ下向、生徒ら

自宅が津波に遭い、大半の生徒が仮設住宅や親戚の家から学校に通う。江ヨさんら合唱を出発する

も加古川を訪れた。父の信之さん(46)は「淡々と演奏している姿を見て、また一回り大きくなったり替えができたのでは」とうなずいた。

一方、岩手県宮古市の第一中学のバレー部とソフトボール部の33人は、スポーツで加古川の中学生と交流。夜はバーベキューで親睦を深めた。

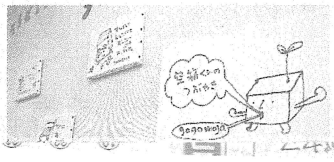
ふぁいる

◆似顔絵を描いて世代間交流　「敬老の日」発祥の地として知られる多可町八千代区などで3日、「おじいちゃんおばあちゃんと絵を描こう会」が開かれた＝写真。町立小学校7校の児童と、高齢者大学「県いなみ野学園」（加古川市）の学生ら計約100人が、互いに交流を深め

町教委

はりま カルチャー　今週のおすすめ

■多目的スペース「空箱」のキャラクター展　JR加古川駅前の元旅館を活用した施設「空箱」のオープンを記念した作品展「そらば



を植えた」を預かっ

は4日、一

や避難者

「花で」

が和らい

有馬高1

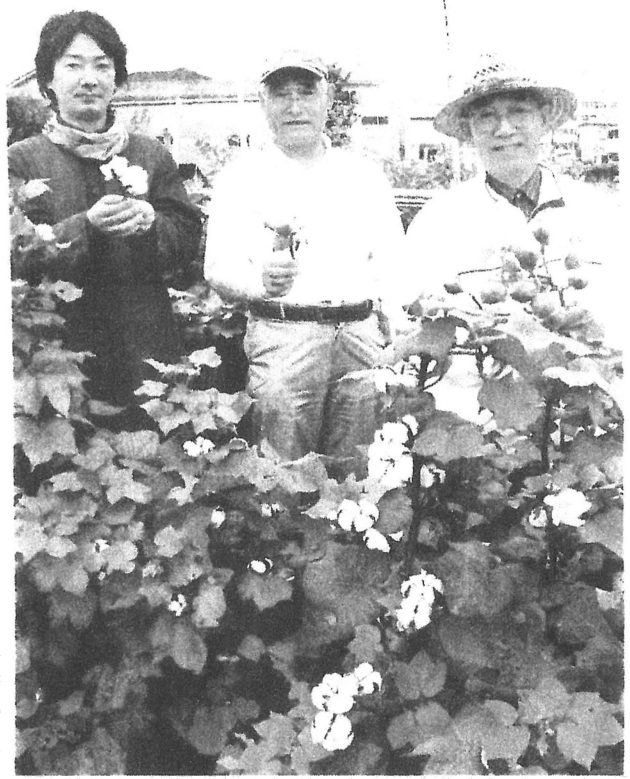
(15)。松

資料3

江戸期は綿の産地

あす加古川 歴史伝える「まつり」

綿摘みや糸紡ぎの体験を通して、江戸時代に綿の産地だった加古川市の歴史を知ってもらおうと「播磨の綿まつり」が3日、開かれる。会場となる同市加古川町粟津の畑には、180株が植えられ、純白の綿が秋風に揺れる。（大城周子）



丹精して育てた綿を手にする（左から）白井克明さん、吉田義弘さん、白井信雄さん＝加古川市加古川町粟津

種取り、糸紡ぎ体験通し

吉田義弘さん(65)＝同市西神吉町、それに白井信雄さん(71)＝同市東神吉町＝と息子の克明さん＝同市別府町＝らが企画し、今年で3度目。3人は休耕田を活用して綿の栽培を始め、「綿が特産だった歴史を身近に感じてほしい」とイベントを開くことにした。

5月に種をまいた約60平方㍍の畑には、高さ約1㍍に成長した日本綿30本と西洋綿150本が並ぶ。「虫に食べられたり、うまく生育しなかったりで、2、3度種をまき直した」と吉田さん。真夏は水やりに気を配った。

台風で倒れたものもあったが、おおむね順調に育った。20年前から綿の栽培に取り組む吉田さんは「経験が生かされ、年々、生育状態がよくなっている」と話す。9月から収穫を始め、今の時期も黄色や赤色の花、実がはじける前の「コットンボール」が見られる。

1本の木からは約80～100㌘の綿が採れる。綿まつりでは、綿摘みや、綿繰り機を使った種取り作業、糸車を回す糸紡ぎの体験ができる。刺し子・裂織(きれおり)作家でもある克明さんは「綿の木を目にする機会は少ない。実際に触れて楽しんでほしい」と呼びかける。

午前10時～午後3時。無料。綿木（ドライフラワー状のもの）や、心身障害者通所施設「わかば学園」による菓子販売もある。同市加古川町粟津のあかりの鹿児資料館から南東に約300㍍。吉田さん☎0079・432・0956

資料4

新聞　2012年9月19日(水) 神戸新聞 朝刊
（第３種郵便物認可）

綿花生産の歴史学ぶ

加古川・西神吉小 地域探検クラブ

加古川市立西神吉小学校の地域探検クラブが、江戸時代に全国屈指の綿花の産地だった郷土の歴史を学ぶ活動に２学期から取り組む。18日は、４～６年の８人が同市西神吉町大国にある綿花畑を見学し、近くに住む高砂市文化財審議会委員の山本徹也さん(75)から綿花栽培の普及と繊維工業の歩みについて話を聞いた。

（井上　駿）

綿花畑を見学する地域探検クラブの児童ら＝加古川市西神吉町大国

同クラブは、郷土史や文化を学び、古里を再発見しようと本年度から活動を始め、９人が所属している。

２、３学期には、綿花を栽培する吉田義弘さん(65)＝同市西神吉町大国＝に協力を得、木綿をテーマに郷土史をひもとくことにした。

この日は雨の中、吉田さんの綿花畑を訪問。丸々と膨らんだ実を触り、興味深そうに観察した。その後、山本さん宅へ。

畑を見学 靴下産業への流れ聞く

山本さんは「姫路藩が綿花の栽培を奨励し、加古川流域は全国有数の産地に成長した」と説明。「綿の仲買や問屋などいろんな商業が発達した。その後は靴下やタオルなど繊維業が興り、靴下は地場産業として今も続いている」と話した。

また、吉田さんが、明治になって西洋綿の流入で栽培農家が激減した過程を解説。用意した和綿と西洋綿を示し「西洋綿は繊維の一本一本が長く、紡績の効率が良い。和綿は繊維が短く、量も少ないが肌触りが優しい」などと紹介した。

５年の小橋歩実さんは「生活に身近な綿が、こんな近くで栽培されているなんて知らなかった。これからの活動が楽しみ」と話していた。

資料５

11月6日(火) 神戸新聞 朝刊

わが町リポート

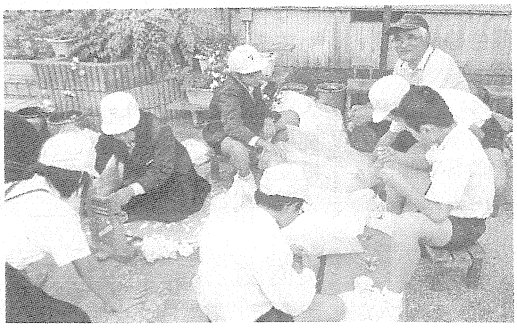
【加古川市】地域探検クラブの児童が綿繰り体験

西神吉小学校の地域探検クラブは、加古川がかつて綿の産地であったことを学んでいる。同クラブの９人はこのほど、西神吉町大国で、綿繰り器という道具を使って種取りに臨んだ。

綿を栽培している吉田義弘さんから「綿の実には30から40個の種が入っているので指先で取るのは困難」と説明を受けると、江戸時代から今も変わらぬ形の道具のハンドルをくるくる回して綿と種を分離させた。

児童たちは2台の道具を交代で使い「種がぽろぽろ取れておもしろい。種が取れるとふかふかになって気持ちいいので、持って帰って家族にせたい」と話していた。

（わが町リポーター・吉田ふみ子）



資料６

柳田国男とともに ❶

没後50年インタビュー

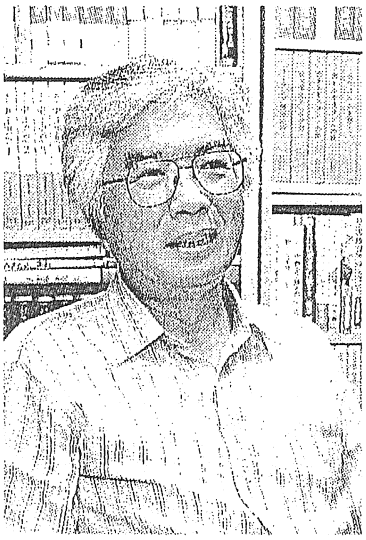
民俗学に倣い播磨記録

常民学舎代表 難波正司さん(58)

柳田国男の民俗学は、歴史の本流とは違う周辺を調べることだ。膨大な時間にわたり、ごく普通に生活してきた人間のことを知ることができる。

高校で歴史を教えるが、教師になった頃、庶民の歴史を教える機会がなく、さみしかった。教科書は結局、中央のエリート集団の記録ばかりで、人間全体の1%にも満たない。99%以上は農業や漁業、林業といった庶民。そうした記録は残っておらず、連綿と続いてきた普通の生活を知りたいと思った。

1986年に常民学舎(じょうみんがくしゃ)を結成し、雑誌「Sａｌａ(サーラ)」を創刊した。柳田が岩手県遠野市に行き「遠野物語」を記したように、播磨の伝統や生活習慣を集め、年2回発行している。当初120人の会員は200人に増えた。



農業が機械化されるまでは民俗学の材料が身の回りにあった。「今はもう調べることがない」という声も聞くが、そうではない。時代が進めば、現代の物も未来の人には希少価値を持つようになる。民俗学が消滅することはなく、柳田の手法や著作も不滅だといえる。

今後は若い人を育て、播磨の民俗を知る事典と呼ばれるような雑誌づくりを目指したい。

(まとめ・有島弘記)

◇

半世紀前の8月8日、福崎出身の民俗学者、柳田国男がこの世を去った。その功績に独自のまなざしを向ける4人に〝民俗学の父〟について尋ねた。

なんば・まさし　姫路市香寺町出身。福崎高校教諭。「柳田は僕の原点。学問の基礎を築いた功績は偉大」

資料9